



童話の部
優秀賞

第38回 日産 童話と絵本のグランプリ

ナツちゃんの考えごと

くさ か あき こ
日下 昭子

夏の朝のことです。
「お日様が強くなるから、帽子をちゃんとかぶりましょうね」
お母さんはつばの広い帽子をかぶり、あごに帽子のひもをかけました。
ナツちゃんは空を見上げました。
「でも、まだそんなに暑くないよ。ナツちゃん、平気だよ」
ナツちゃんの帽子は、首のまわりにだらりと下がっています。
二人はたつた今、庭に出て来たところでした。庭はしつとりと、おだやかです。太陽は雲の向こうに見えかくれしていて、まぶしくはありませんでした。
「すぐに暑くなるわよ。ナツちゃん、もう赤ちゃんじゃないんだから、お母さんの言うことを……」
お母さんが言い終わらないうちに、ナツちゃんは、帽子をぐいと引っばつて、頭にきちんとかぶりました。
犬のマロンが二人を見上げて、くると巻いたしつぽをゆらしました。遊んでもらえるのを待っているのです。
二人は花だんの入り口で立ち止まりました。

ました。そこには、朝顔やひまわりや、ほかにも色とりどりの花が咲いています。緑色の草もたくさん生えています。
「ナツちゃん、お母さんといっしょに、お花に水をやるでしょう？」
ナツちゃんはちよつと考えました。
「ううん。きょうナツちゃんはね、ブランコに乗るの」
お母さんは意外そうな顔をしました。何でもいっしょにやりたがるナツちゃんが、さそいを断るなんてめずらしいことです。
ナツちゃんはつけ加えました。
「大事な考えごとがあるの」
その真剣そうな顔を見て、お母さんはフツツと笑いました。
「じゃあ、ゆつくり考えごとをしてちょうだい。お母さんは花だんにいるわね」
お母さんはホースを手に取りました。ナツちゃんは、花だんの向こうにあるブランコの方へ歩き出しました。マロンがついていこうとすると、
「マロン、あっちへ行つて。これから考えごとをするんだからね」

と押しやりました。
それでもマロンはじやれつきます。ナツちゃんはマロンの頭に手を置いて、大人っぽく言いました。
「マロン、赤ちゃんみたいにしないで、ナツちゃんの言うことを聞きなさい」
これはお母さんのまねでした。マロンはしょんぼりして、お母さんのそばへ行つてしまいました。
お母さんは、ホースで花の根もとに水をかけていきます。マロンは、ぬれた地面に鼻先をつつこんで、そのたびにお母さんにしかられました。
ナツちゃんはブランコに座つて、しばらくお母さんの水やりをながめていました。
それからゆつくりと、地面につけた足でブランコをゆらしはじめました。
ゆらゆらゆれながら考えていたのは、こういうことです。
(エリちゃんも、ミサキちゃんも、自分のことを「わたし」って呼んでる。かっこいいなあ、大人みたいで。ナツちゃんも言ってみよう。でもいきなり「わたし」って言うのは、はずかしいなあ)

セミがジージーと鳴きはじめました。
うるさいなあ、と思いつつながら、ナツちゃんは小さな声でつぶやきました。
「ナツちゃんは……じゃやない、ええと……うるさいなあ……ナツちゃんは……じゃやなくて、ええと……ええと……」
セミの鳴き声は、ずっとナツちゃんの耳にまとわりつきました。
だんだんあきてきてきたナツちゃんは、ブランコに立って乗りたいと思いました。でもお母さんからは「立つときは気をつけるのよ」といつもうるさく注意されます。
お母さんはしゃがみこんで、花のまわりのよけいな草を抜いていました。はばの広い帽子のつばで、顔はまったく見えません。マロンはお母さんの後ろにかくれて、土を掘るのにいっしょうけんめいです。
(だいたいようぶ。ナツちゃんはまだ赤ちゃんじゃないもん)
ナツちゃんはブランコに立ちあがり、持ち手をしっかりとぎって、体重

をかけました。
ぐん、ぐん、ぐん。
前に、後ろに、前に、後ろに。
ブランコにリズムがついてきました。だんだん暑くなつてきて、セミの声はますますにぎやかです。
(セミの声になんか、負けないから)
ナツちゃんはルールを決めました。前にゆれたら「わたし」と言う。後ろにゆれたら「わたしは」と言う。これをつけていくのです。
ぐうん、ぐうん、ぐうん。
前に、後ろに、前に、後ろに。
青空が近くなつたり、はなれたりします。白い雲はけずりたてのかき氷みたいで、見るたびに形が変わります。
「わたし、わたしは、わたし、わたしは」
何度も練習しているうちに、うまく言えるようになりました。
問題は次のことです。
(それから、どう言ったらいいのかなあ?)
いっしょうけんめい考えていると、こいでいる足に力が入ります。
ぐうーん、ぐうーん、ぐうーん。

前に、後ろに、前に、後ろに。
ブランコは大きくゆれました。かき氷の雲が飛び去ると、すぐに地面が通りすぎます。ナッチちゃんは少しこわくなってきました。

(ちよつとこわいな。ナッチちゃんこわい。そうだ！ わたし……こわい。これを、続けて言えばいいんだ)

風で帽子が飛ばされて、首のまわりにぶら下がりました。

「わたし……こわい……わたしは……こわい……わたしは、こわい」

うまく言えました！

でもその声は小さくて、セミのなき声には勝てません。

お母さんはせつせと草をむしっています。マロンは何かを感じたらしく、頭を上げてこちらを見ました。

ナッチちゃんはマロンに笑いかけます。だんだん楽しくなってきました、思い切りブランコを踏み出しました。

ぐううーん、ぐううーん、ぐううーん。

前に、後ろに、前に、後ろに。

「わたし……楽しい……わたしは……」

楽しい……わたしは、楽しい！
すると、何かがふわっとナッチちゃんを持ち上げました。ほんの、いっしゅんのことです。

気がつくと、ナッチちゃんは草むらの上に、おおむけになつて寝ていました。

セミはそのとき鳴くのをやめて、あたりはしーんとなりました。

びつくりしたナッチちゃんは、声も出せません。ひじで支えて体を起こすと、草むらにのびた自分の足が見えました。

うわああああん！

ナッチちゃんは大声で泣き出します。いえ、まだ泣いてはいません。そうしようと思っただけです。転んだときはいつもそうします。お母さんが飛んできて、「どうしたの？」「けがをしたの？」と聞いてくれるはずです。

泣き声もれかけました。涙もちよつぱり流れました。ところがそこで、おかしいな、と思いました。どこもいたくありません。

草むらに手をついて、そろそろと立ち上がりました。やっぱりけがないようです。

マロンが走ってきました。マロンはナッチちゃんにだきついて、しつぽを右に左にゆらしませます。マロンをなでているうちに、ナッチちゃんの涙はかわいてしまいました。

お母さんがこちらを向いて、花だんから呼びかけました。

「ブランコは終わったの？ 考えごとはすんだのね」

どう答えよう、とナッチちゃんは迷いました。

「お母さん、あのね……」

するとセミがまた鳴きだして、ナッチちゃんの声をさげぎります。

かき氷の雲は、どこかへ行っていました。太陽がまぶしいほどに、じりじりと照っています。

だれかがそつとナッチちゃんの背中を押しました。ふり返ると、だれもいません。ブランコがのんびりゆれて、あたたかい風が吹いていきました。

お母さんが、ナッチちゃんのそばへやってきました。
「暑くなってきましたわね。もうお家にはいりましょうか」
「うん。お母さん、ナッチちゃんね……」
と言いかけて、ナッチちゃんは首のまわりに落ちた帽子を、ちゃんと頭にかぶりしました。
「わたし、わたしね、転んだの。でも、わたしね、ひとりで起きたの。わたしは泣かなかつたよ。わたしはえらかつたよね？」
得意げなナッチちゃんの顔を見て、お母さんはフツツと笑いました。
「そうなの。えらかつたわね。ナッチちゃんは、もう赤ちゃんじゃないものね」
ナッチちゃんとお母さんは手をつなぎ、家の方へ歩いていきました。マロンも、くるりと巻いたしつぽをたてて、いそいそと続きます。
ブランコは、まだかすかにゆれていました。



くさ か あき こ 日下 昭子

無職 大阪府

受賞のことば
ブランコに乗って内緒の練習をしたこと、ブランコから落ちて泣きそうになったこと、どちらも懐かしい思い出です。大人になろうと懸命だった頃のエピソードが受賞につながり、大変嬉しく思います。諦めずに繰り返すことが大事だと、当時の自分が教えてくれたのでしょうか？ 本当にありがとうございました。

【受賞歴】 第35回 日産 童話と絵本のグランプリ 佳作

審査員コメント

幼い子どもの小さな成長は、本人にとっては、とても大きな出来事なのですね。それがよく伝わってくる作品です。ブランコでゆれながら考えるという設定も面白い。文章も読みやすく破綻がありません。工夫の凝らされた敬体が、やさしい雰囲気を支えています。

吉橋 通夫